罪作りなボイス

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
罪作りなボイス

【Ｎコード】
Ｎ０８３７ＢＡ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
紘は学校の放送のその声を聞くだけでもう我を忘れて取り乱す。周りはその彼にその声の主と会わせると彼は余計に。知人に物凄く可愛い声の人がいましてその人からヒントを得た作品です。

第一章

罪作りなボイス

その声を聞くとだ。
彼、泉谷紘はだ。いつも急に取り乱すのだった。
その彼を見てだ。クラスメイト達は笑いながら言う。
「だからよ。放送部だからな」
「いつも聞こえて当然だろ」
「それで何でそんなに取り乱すんだよ」
「普通にいればいいだろ」
「あ、ああ」
一応だ。紘も言葉遣いだけは冷静に返す。
しかしだ。態度は取り乱したままでだ。こう彼等に言うのだった。
「そうだよな」
「そうだよ。落ち着けって」
「別にあれだろ？香菜ちゃんのこと何でもないんだろ？」
「そうなんだろ？」
「あ、ああ」
取り乱したままでだ。答える彼だった。
そのうえでだ。左右に整えた黒髪を櫛でさらに整えてだ。
細くしている眉に手をやってから述べる。見ればだ。
高校のブレザー、ライトブルーのそれにダークブルーのズボンと
ネクタイ、白いブラウスの制服を上手に着こなしている。
目は涼しげであり中々整った顔をしている。その彼がだ。
こうだ。クラスメイト達に話すのだった。
「そうだよ。僕あの娘のことはどうでもさ」
「いいんだよな」
「じゃあ落ち着けって」
「そうしろって」

「落ち着いてるさ」
一応こう言う。
「それでだけれど」
「ああ、今度の放送担当は火曜らしいぜ」
「香菜ちゃん朝から入るらしいからな」
「楽しみにしてろよ」
周りはまだ笑いながらだ。紘に言う。
「しかし放送部もいい娘手に入れたよな」
「だよな。あの声でな」
「しかも可愛いし」
「性格も真面目で素直で」
「結構お似合いじゃねえ？」
「だよな」
こうだ。紘を見て笑いながら言うのだった。
「折角だからどうだよ」
「一回な。一緒にいたらどうだよ」
「少しだけでもな」
「だからどうしてそんな話になるんだよ」
顔を真っ赤にしてだ。紘はまた言う。
「全く。とんだ濡れ衣だよ」
「濡れ衣ねえ。じゃあ火曜になってもな」
「何にもないよな」
「普通にな」
「過ごせるよな」
「当たり前だろ」
一応口ではこう言う彼だった。
そしてだ。こんなことも言った。
「火曜が来ても僕は何ともないからな」
「まあな。それじゃあな」
「火曜な、火曜」

「間違っても月月火水木金金で水曜とかじゃないからな」
海軍の訓練や戦時の日時である。こうして休みをなくしていたのだ。従って海軍の火曜日は他の世界では水曜にあたるのである。
そんなことも冗談で言いながらだ。彼等は紘が火曜を迎えるのを待っていた。そしてだ。その火曜日が来てしまったのであった。
クラスメイト達が登校するとだ。教室にだ。
もう紘がいた。しかもだ。
普段より髪も整え身だしなみもいい。その彼を見てだ。
クラスメイト達はだ。にやにやして言うのであった。

第二章

「あれっ、デートかい？」
「何かいつもよりお洒落じゃないか？」
「服だってアイロンかけて」
「糊まで効かしてるか？」
「たまたまだよ」
自分の席にだ。もう着席している彼は必死の顔で言い繕う。
「親父が制服にアイロンかけろって五月蝿くてさ」
「親父さんがそんなこと言うか？」
「普通言わないだろ」
「そうだよな」
誰もがだ。真相はわかっていた。
しかしだ。今はだ。あえてこう彼に言うのだった。
「まあそれでもな」
「身だしなみはきちんとする方がいいよな」
「髪だってな」
「いつも以上に整えてるし」
「あっ、これは」
またしてもだ。必死に理由付けして話す紘だった。
「あれなんだ。お袋が朝はちゃんとシャンプーしてセットしろって」
「朝シャン？ちょっと古くないか？」
「だよなあ」
このこともだ。彼等は察して話す。
「って部活の朝の練習は？」
「そっちは？」
「もう終わったよ」
そのだ。軟式野球部の朝の部活はもう終わったというのだ。
そのうえでだ。彼はまた話すのだった。

「それでまあ」
「速攻で着替えてここにいるってのか」
「クラスに」
「もう少しかな」
教室の時計をちらりと見てだ。彼は言った。
「あと少しで」
「そうそう、放送入るな」
「もう香菜ちゃん放送室にスタンバイしてるよな」
「ああ、もうすぐだよな」
「放送入るぜ」
「いよいよだぜ」
彼等もにこにことしてだ。紘を見ながら話す。そうしてだった。
壁にかけられている丸い時計の時間が八時になった時に。その声が聞こえてきたのだった。
「おはようございます」
「ほい来た」
「放送開始だ」
「はじまったぜ」
クラスメイト達がその声を聞いて言う。確かにだ。
声は清らかで可愛らしい。高く澄んでいる。その声を聞いてだ。
自然とだ。紘の顔がだ。
にこにことしたものになる。まるで魚が水の中に入った様に・・。
そしてだ。彼女の声を聞いているうちにだ。
その顔がさらに笑顔になりだ。それで言うのだった。
「やっぱりなあ」
「にやけてきたな」
「もう幸せの絶頂にあるみたいなな」
「そんな感じだよな」
こう言うのである。そしてだ。
放送の間中ずっとにこにこしている紘はだ。放送が終わるとだ。

こんなことを言うのだった。
「じゃあ今日はな」
「今日は？」
「今日はっていうと？」
「最高のスタートを切れたな」
そうだというのだ。
「もうな。最高のスタートだよな」
「へえ、そりゃ何でだ？」
「何で最高のスタートなんだ？」
「それは」
「いや、何でもないさ」
とりあえずだ。隠す努力をする彼だった。

第三章

それでもだ。ついだった。
「あの声っていいよな」
「ほら、言ったよ」
「やっぱり香菜ちゃんだよな」
「香菜ちゃんの声聞いてな」
「元気が出るんだな」
「だから違うって」
まだ言う彼だった。今更だがだ。
「僕はただ」
「けれど声聞くとな」
「全然違うよな」
「本当にな」
「それを今更言ってもなあ」
「何ていうか」
手遅れだ、とはあえて言わない彼等だった。しかしだ。
彼はこの日最初から最後まで上機嫌だった。それでだ。
部活も下校もだ。笑顔のままだった。これが彼だった。
そんな中でだ。昼の放送時間の時だ。
香菜の放送を聞きながらクラスで弁当を食べている彼にだ。クラスメイト達がだ。
こんなことをだ。彼に言ってきた。
「ちょっといいか？」
「飯食い終わってからでいいからな」
「んっ、何だよ」
弁当のおかず、ハンバーグを食べながらだ。紘は彼等に返した。
「何か奢ってくれるのか？」
「そのドカ弁食ってまだ食うのかよ」

「しかもおやつに林檎まであるだろ」
「お茶も飲んでるのにか？」
「まだ食うのかよ」
「育ち盛りなんだよ」
幾分小柄の彼だがそれでもこう言うのだった。
「だからいいんだよ」
「育ち盛りっていってもな」
「幾ら何でもそれはないだろ」
「本当にな」
「食い過ぎたら太るだろ」
「僕別に太る体質じゃないから」
特に気にしないとだ。彼は返す。
そのうえでだ。クラスメイトに問い返した。
「で、何なんだよ」
「ああ。御前呼ばれてるぜ」
「ちょっとな」
「余ばれてる？誰にだよ」
そう言われてだ。紘はだ。
今度は弁当の白米を掻き込みながらだ。それで言うのだった。
「一体誰なんだよ」
「まあちょっと来てくれよ」
「来てくれればわかるからな」
「それでな」
「別に先輩の誰か怒らせたとかじゃないよな」
それでだ。呼び出しではないかというのだ。
「そうじゃないのか？」
「だからそういうのじゃないからな」
「っていうかそんな物騒な話こんな笑顔でするか」
「安心しろって。そういうのじゃないからな」
「それは保障するぜ」

確かにだ。そういうことはないとだ。彼等は言った。
それでだ。あらためて言うのだった。
「っていうか御前確かにあれなところあるけれどな」
「別に他人に怨まれたりとかないだろ」
「そういうことはしないだろ」
「好き好んで怨まれる趣味はないからな」
彼自身もだ。こう答える。
「特にな」
「だろ？だったら安心しろって」
「まあ悪い娘じゃないしな」
「会いたいって言ってるからな」
「ふうん。それで場所は？」
弁当を食べ終えてだ。おやつの林檎をかじりながらだ。

第四章

そのうえでだ。彼はあらためてクラスメイト達に尋ねた。
「場所は何処なんだ？」
「体育館裏な」
「そこだからな」
「そこなあ。何なんだ？」
彼はここで気付いていなかった。クラスメイト達がだ。
『娘』と言っていたのだ。『こ』という言い方だったので『子』と勘違いしたのだ。そのことに気付いていないままだ。彼等の話を聞いていたのだ。
そしてだ。その彼にだ。
クラスメイト達はだ。さらに言った。
「じゃあいいな」
「早く食えよ」
「食い終わってから行くからな」
「ああ、わかったよ」
林檎を素早くかじり終えてだ。ペットボトルのお茶を飲んでだ。
そのうえで彼は体育館裏に向かう。そこにはだ。
クラスメイト達もついて来る。その彼等を見てだ。
いぶかしみながらだ。彼は彼等に尋ねた。
「何でついて来るんだ？」
「まあな。ちょっとな」
「いいからいいから」
「気にしないでくれよ」
「いや、気になるからな」
こうだ。彼等に返すのだった。
「僕一人でもいい話じゃないのか？」
「いいからいいから」

「行こうぜ」
「それじゃあな」
「一体何なんだよ」
紘だけが事情がわからずだ。目を顰めさせていた。
だがそれでもだ。その体育館裏に来た。日はあまり強くなく人気もない。右手には体育館の白い壁があり左手には皐や桑がある。
その白と緑の中を通るとだ。その先にだ。
髪を短く切りだ。そして。
黒髪を奇麗に短く切り揃え大きな銀杏に似た形の黒い目をしている女の子を見た。前髪が眉を隠してしまっているが時折見える眉は細い。
口はやや大きく紅である。顔は白く雪を思わせる。
背は一六〇程で僅かばかり太めに見えないこともない。白いガードの硬い感じの軍服を思わせる制服はスカートだけが短い。
その彼女がだ。紘の前にいた。
彼女を見てだ。紘はすぐにこう言ってしまった。
「岡田さん？」
「あっ、はい」
香菜だ。その彼女がだ。
少し戸惑った様な声でだ。彼に言ってきたのだ。
「今度練習試合ですよね」
「ああ、軟式野球部の」
「泉谷君は確か」
「うん、ショートだよ」
彼のポジションはそこなのだ。敏捷さとグラブ捌きを買われてなったのだ。
「二番ショートでね。出る予定だけれど」
「わかりました。その試合を」
「その試合を？」
「観ていいですか？」

こうだ。紘に言ってきたのだ。
「よかったら」
「えっ、いいの！？」
「私の方も。よかったら」
お互いにだ。こう言い合うことになった。しかしだ。
紘の方がだ。さらにだった。
驚き戸惑いながらだ。そうして言ってきたのだった。
「そんな、岡田さんが来てくれるって」
「駄目ですか」
「駄目じゃないよ」
強い声でだ。彼は言い切った。
「駄目な筈ないじゃないか」
「そうですか。じゃあ」
「うん、観に来て」
紘は興奮しきった声で告げた。後ろにいるクラスメイト達はその彼には何も言わない。ただ二人を見ているだけだった。ここでは。

第五章

その彼等に気付くことなくだ。紘は言うのだった。
「是非。僕頑張るからさ」
「それじゃあ」
「そうして。次の日曜だよ」
曜日をだ。自分から言う彼だった。
「絶対に観に来てね」
「場所はこの学校ですよね」
「そう、この学校のグラウンドで一時から」
その練習試合の詳しい時間もだった。
紘は自分から言ってだ。そうしてだった。
約束を取り決めたのだ。一応話は終わった。香菜は優しい微笑みでだ。その紘に言ってきた。
「じゃあこれで」
「うん、これで」
「これから放送がありますから」
放送部員としてだ。彼女は今は話した。
「すいません」
「あっ、それじゃあね」
「日曜に」
「そう、日曜にね」
「また」
こう言ってだった。今は別れたのだった。
紘もだ。香菜が向こうに去っていくのを見届けてからだ。
自分も踵を返した。ここでやっと気付いて思い出したのだ。
クラスメイト達がいた。その彼等はずっといたのだ。
だが紘も香菜もこのことには気付かなかったのだ。もっと言えば二人のことだけで一杯で彼等のことには気が回らなかったのだ。

しかし彼等はだ。紘に対してだ。
にやにやと笑ってだ。こう言ってきたのだった。
「よかったなあ」
「今度の日曜か」
「練習試合観に来てくれるんだな」
「一時だよな」
「いたのか」
今更思い出してだ。こう返した紘だった。
「そういえばそうだったよな」
「そうだよ。いたよ」
「ずっと見守っていたからな」
「よかったな。本当にな」
「頑張れよ、試合もそっちもな」
「そっちって何だよ」
ついだ。紘はその言葉にも反応した。
そしてだ。こう言ったのだった。
「そっちって」
「まあな。頑張れって」
「言うのはそれだよ」
「俺達からはな」
「だから何なんだよ」
紘はその『そっち』についてはだ。どうしても認められなかった。
そしてだ。
部活にも励みだ。日曜を迎えた。彼は。
やはり二番ショートだった。前日に顧問に告げられた。その顧問の先生は。
彼にだ。部室でこんなことも言ってきた。
「いいか。牛若丸になれ」
「源義経ですか？」
「ああ、吉田義男になれ」

笑顔でだ。こう告げたのである。
「今度の試合もな」
「何か随分古いですね」
「別にいいだろ。凄い選手だったんだからな」
「けれど先生あの人の現役の頃知らないですよね」
見れば先生は三十代といったところだ。そろそろあちこちに肉がつきはじめている。とてもだ。吉田が現役だった頃を知っていそうにはない。
しかしだ。それでもだった。
先生はだ。また話すのだった。
「真弓とか平田の頃なんじゃないんですか？」
「まあそうだな」
「それでも先生が子供の頃ですよね」
タイガースフィーバーも過去のものになっている。今は新しい阪神の時代だ。

第六章

「それで牛若丸って」
「古いがまあいいだろ」
「鳥谷じゃないんですね」
「鳥谷も悪くないが阪神のショートはやっぱり吉田さんだろ」
「だからですか」
「そうだ。だから牛若丸になれ」
そこにだ。話を強引にやってだ。
「わかったな」
「わかりました。じゃあ」
「巨人を倒せ」
相手は巨人でなく硬式野球でもない。しかしだ。
顧問の先生はだ。こう紘に告げた。
「わかったな」
「わかりました。それじゃあ」
「活躍を期待するぞ」
紘もアンチ巨人なので先生の言葉には素直に頷けた。まさに巨人は北朝鮮と並ぶ日本人にとって最大の憎むべき怨敵なのである。
何はともあれ彼はだ。試合に向かう。その試合は。
観客が多かった。紘の学校だけでなく相手の学校からも来ていた。
「只の練習試合にしちゃな」
「結構お客さん多いよな」
「またどうしてなんだ？」
「篠田麻里子でも来てるのか？」
中にはこんな冗談まで出た。とにかく練習試合にしてはだ。グラウンドの周りに人が多い。紘達もこのことについて言うのだった。
だが、だ。それについてだ。観客の方から答えがあった。
「こっちも部活があってそれの休みとか帰りなんだよ」

「で、こっちも部活同士で交流あるから」
「それで一緒にいるんだよ」
「暇潰しに観に来てるの」
そうした事情からだった。彼等は観に来ているのだ。つまり只の時間潰しなのだ。
大抵の面々はそうだった。しかしだ。
紘は違っていた。観客の中にだ。
香菜を見つけた。それで顔を真っ赤にしていた。
その彼を見てだ。部員達は言う。
「おい、試合中はな」
「しっかりプレイしろよ」
「エラーとかしないでくれよ」
「ちゃんと打ってくれよ」
「ああ、わかってるさ」
それはわかっているとだ。紘も答える。
「ちゃんとやるからな」
「まあ御前は試合になったら固くなったりしないからな」
「安定感あるしな」
「そこは大丈夫だけれどな」
それでも一応釘を刺したのだ。だが今の紘は。
ずっと香菜を見ている。おそらくにやけているのを隠す為だろう。
左手にはめているグローブで口元は隠している。しかしだった。
目はだ。にやけるにも程があった。しかもだ。
香菜もだ。彼にこう言うのだった。
「泉谷君、頑張って下さいね」
「あっ、うん」
紘もだ。その顔で応える。
「頑張るからね」
「はい、期待しています」
こうだ。彼に声をかけるのだ。その声援を受けてだ。

彼はさらに危ない様子になりだ。試合に赴くのだった。こうした中で試合がはじまった。
その試合において彼は最高の守備を見せた。
左右に素早く動きボールを捌いていく。まさに牛若丸だった。
捌いたボールは的確にファーストやセカンドに投げアウトを作っていく。守備では大活躍だった。
ただしだ。バッティングは。
送りバントは見事にこなしていく。だがヒットはなくだ。凡打ばかりだった。
「まあ送りバントさせてるからな」
「仕方ないですか」
「俺もそこまで要求しないさ」
そうだとだ。先生はマネージャーに話す。黒いヘルメットに白いユニフォーム、この乾式野球部のユニフォームを着てベンチに座っている。
「今日も守備は見事だしな」
「送りバントもちゃんとしてくれてますし」
「三振もない。二番バッターはそれでいいんだよ」
二番は二番の役目がある。一番が出たら送る。これもメインなのだ。
だからだ。それでいいとしてだ。
監督としてだ。試合を進めていた。
試合は進みだ。九回裏になった。点数は同点だった。

第七章

「三対三か」
「相手も強いですね」
「ああ、強いな」
先生は難しい顔でマネージャーに応えた。
「うちのピッチャーも頑張ってくれてるんだがな」
「それでもですね」
「相手も粘ってくれるよ」
「それで九回裏ですけれど」
その九回裏でだ。状況は。
ワンアウト三塁だ。三塁に逆転サヨナラのランナーがいる。そして。
バッターボックスには紘がいた。その彼を見てだ。
先生はだ。マネージャーにこっそりと囁いた。
「ここはどうするべきだと思う？」
「ワンアウト三塁でバッターは泉谷君ですね」
「ああ、その泉谷だ」
「今日はあまり当たってないですし」
「スクイズか？」
先生はぽつりと呟いた。
「それがいいか」
「そうですね。例えウエスト仕掛けられても」
「あいつならやってくれる」
紘のバントの腕を知っているからだ。先生は言った。
「それじゃあな」
「スクイズですね」
「決めた」
采配をだ。そうしたというのだ。そしてすぐにだ。

先生は紘にサインを送った。スクイズのサインだ。
それを見てだ。彼もだ。
身構える。スクイズの為に。
既に自分のバントの技量は相手に見せている。しかもワンアウトランナー三塁という絶好の状況だ。この状況は相手もわかっている。
それならだ。相手がすることは。
「ウエストボールもあるな」
こうだ。察したのである。だから余計にだ。
身構えていた。ここで成功させれば勝てるからだ。
こうして賭けに近い勝負に向かう彼にだ。香菜は。
まただ。彼に声援をかけてきた。
「チャンスですよ、やって下さいね」
「げっ、まずい」
「そこでそう言ったら幾ら冷静なあいつでも」
「ここは冷静じゃいられないぞ」
「何するかわからないぞ」
ベンチは彼女の言葉にだ。不安に包まれた。
「こんな状況だしサイン無視して打つとかな」
「あいつ今日当たってないのに」
「それでそう言ったら」
「それこそ」
最悪の事態になる。そう考えたのだ。
しかしだ。彼は。
気合が入った。これまで以上にだ。そうしてだ。
バッターボックスで構える。そのうえでボールを待つ。
サインは見ていた。スクイズだ。それを成功させるつもりだ。
相手のピッチャーが投げる。その瞬間に。
彼はバントの構えになり三塁ランナーがダッシュをはじめた。まさにスクイズだ。
しかしだ。相手の投げたボールは。

ウエストボールだった。外してきたのだ。
「しまった！」
「読まれてたか！」
「そう来たか！」
誰もがこのことに愕然となった。スクイズは奇襲だ。だからこそ読まれては何にもならない。ランナーが三塁にいても常に前に転がせばいいというものではないのだ。
外されては終わりだ。どうにもならない。作戦は失敗だと。誰もが思った。
しかしだった。ここでだった。紘は。
跳んだ。外されたそのボールの方にだ。そしてだった。
バットにだ。ボールを当てたのだ。その当てられたボールは。
前に転がる。そして相手ピッチャーの前で止まった。その間に。
三塁ランナーはホームに滑り込んだ。これで決まった。
スクイズは成功しだ。紘達は勝った。彼は見事スクイズを成功させたのだ。
だがボールに向かって跳んだせいで体勢を崩した彼はだ。そのまま倒れていた。そうして何とか立ち上がったその彼にだ。
部員達が駆けて来てだ。笑顔で声をかけたのだった。

第八章

「おい、やったな！」
「スクイズ成功したぞ！」
「御前のお陰だよ！」
「よくやってくれたよ！」
「ああ、何とかやれたよ」
紘もだ。立ち上がってから腹の砂を自分の手で払いながらだ。彼等に応えた。
「スクイズ成功させたよ」
「本当にな、やったよ」
「よくあんなの成功させたよ」
「外されたのに当てるなんてな」
「あんなのそうそうできないぞ」
こうだ。仲間達は満面の笑顔で彼に言う。練習試合とは思えない喜び様だ。
そしてだ。観ている面々も驚きと喜びを隠せなかった。
それでだ。こう言うのだった。
「凄いな、本当にな」
「よくやれたよ」
「幾ら何でもあれは無理だって思ったけれどな」
「やったな、あいつ」
「凄いことしやがったよ」
こう口々に言うのだ。そしてだ。
香菜もだ。笑顔でだ。こう言った。
「泉谷君やりましたね」
「ああ、多分あんたのお陰だよ」
「あんたがさ、あいつに声をかけたからな」
「あそこまでの力出せたんだよ」

そのせいだとだ。彼女に話す。すると彼女は。
清らかな笑顔になってだ。今度言った言葉は。
「だって私」
「私？」
「私っていうと？」
「泉谷君のこと好きですから」
ここでだ。衝撃の告白だった。
「応援して当然じゃないですか」
「えっ、泉谷のこと好きだったの」
「そうだったの」
「あいつのこと好きだったんだ」
「あいつの片思いじゃなかったんだ」
今の告白にはだ。誰もがだ。
喜びから一転してだ。唖然となりだ。
そうしてだ。香菜を囲んで尋ねるのだった。

第九章

「それ本当！？」
「あいつの何処がいいの！？」
「確かに悪い奴じゃないけれど」
「背はあまり高くないし成績も中位で」
「結構おっちょこちょいだし」
「抜けてるところも多いし」
「それはですね」
笑顔でだ。香菜は周りに話していく。
「性格もいいですし」
「まあなあ。意地悪い奴じゃないしな」
「むしろ親切で思いやりがあるよな」
「とりあえず性格はいいよな」
「ずぼらなところがあるけれどな」
欠点はあるがそれでもだというのだ。しかしだ。
彼等はここでだ。香菜のこの言葉に問うた。
「けれど性格『も』！？」
「性格が第一じゃないんだ」
「じゃああいつを好きな一番の理由は？」
「それって何なの？」
「私を好きでいてくれるからです」
これがだ。第一の理由だというのだ。
「好きでいてくれてるからです」
「つまり。自分が相手を好きなら？」
「相手も自分を好きになる」
「そういうことになるよな」
「これってな」
「そうですね。泉谷君が私を好きですから」

にこりと。まるで天使の様な笑みでだ。香菜は話す。
「私も泉谷君が好きになりました」
「ってことはだ」
「あいつが好きでこの娘も好きなら」
「相思相愛？」
「じゃあもう阻むものはないから」
誰もだ。紘のそのあからさまな熱さには敵わなかったのだ。
「カップルの誕生かあ」
「そうなるのね」
こうした話をだ。この状況では外野になる軟式野球部の面々もだ。
もう一方の当事者である紘に対してだ。こう言ったのである。
「おい、聞いたか」
「あの娘も御前のことが好きだってよ」
「そう言ってるぜ」
「はっきりと言ってるぜ」
「うん、聞いてるよ」
紘自身もだ。こう彼等に応える。
まるで夢を見ている様な顔でだ。彼は応えた。
そしてだ。仲間達に話した。
「これって夢じゃないよね」
「ああ、夢じゃないぜ現実だよ」
「実際になっていることだからな」
「よかったな」
「試合に勝っただけじゃなかったぞ」
「これって最高の結末だよね」
紘は周りに言われてもだ。まだ信じられないといった顔だった。
そしてその顔でだ。香菜を見てだ。
彼女のところに向かう。彼女もだ。
そうして二人で向かい合ってだ。お互いにだった。
二人共俯きだ。顔を赤らめさせている。あまりにも恥ずかしくて

言葉は中々出ない。だがお互いに何とか振り絞ってだった。
「ええと、随分遠回りっていうか足踏みしてたけれど」
「そうですね。私も」
「けれど。今なら」
「そうですね。こうして」
それぞれだ。言う言葉は。
「これから。宜しくね」
「私でよかったら」
言葉と共にだ。今度はお互いに両手を出し合い。
手を握り合う。そして紘はその中でだ。香菜の言葉を聞いた。
「今からはじまりますね」
その言葉を聞いただけでだ。彼は幸せの絶頂に辿り着くのだった。
その声はまさに天使の声だった。人の声にはとても思えなかった。
彼にとっては。

罪作りなボイス　　完

２０１１・８・２４

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0837ba/

罪作りなボイス

2012年1月1日23時53分発行